葉

国語　問題用紙

No. 1

一　雙

別紙の文章は、井上靖の『しろばんば』の一部です。それを読んで、次の問いに答えなさい。

問一　――線①「ジして」の「ジ」を漢字に直しなさい。

問二　――線②「常人ばなれした」、③「いかなる」を、わかりやすい言い方に書きかえなさい。

問三　文中ア～エの【よく（よくも）】について、同じ使い方のものを次の1～5の中から選び、番号で答えなさい。

1. 私はよく犬を連れて散歩に行く。
2. 今年の米はよくできた。
3. 手本をよく見て書きなさい。
4. よくあんな力が出るものだ。
5. そこによく気づいてくれましたね。

問四　――線④「このように［A］な、このように［B］された家」の［A］―［B］に入る言葉として最もふさわしいものを次の1～4の中から選び、番号で答えなさい。

1. A 上品 ― B 洗練
2. A 貧弱 ― B 工夫
3. A 簡単 ― B 整頓
4. A 窮屈 ― B 調和

問五　――線⑤「猫の□ほどの庭」について、□にふさわしい漢字一字を入れ、全体の意味も答えなさい。

問六　――線⑥「洪作は縁側から動かないでいた。」とありますが、なぜか、答えなさい。

問七　――線⑦「頭のてっぺんから爪先まで見廻すようにし」たときの祖父の気持ちを説明しなさい。

問八　――線⑧「そのことからは思いを移している風で」を、「そのこと」が何を指すかを明らかにして、わかりやすく言いかえなさい。

問九　「椎茸」に関して、祖父が初めて行ったことを三つ、簡潔に書きなさい。

問十　――線⑨「榾木などそれまで美しいとは思わなかったが、木の間から洩れている弱い秋の陽を浴びているここの榾木は、何とも言えず美しく見えた。」というのはなぜか、説明しなさい。

問十一　――線⑩「そんな血が自分の体の中にも流れているだろうか」とありますが、このときの洪作の気持ちとして最もふさわしいものを次の1～4の中から選び、番号で答えなさい。

1. 昔から続いている椎茸作りの血を受け継いでいくことは、自分のようなものにはふさわしくないという気持ち。
2. 代々受け継がれてきた椎茸作りの血が自分にも流れているということにおどろき、急には信じられない気持ち。
3. 唐平ならともかく、自分にまでそんな立派な椎茸作りの血が流れていることなど、あるはずはないという気持ち。
4. 祖父が大切にしてきた椎茸作りを自分も受け継がなければならないとしたら大変だ、ときんちょうする気持ち。

問十二　――線⑪「洪作は話を聞いていながら、自分は親戚の中でこの祖父が一番好きだと思った。そしてこの祖父を一番尊敬すると思った。」とありますが、洪作はなぜこう思ったのか、説明しなさい。

問十三　――線⑫「人［　　］する」の部分に、「初めての人になかなかうちとけないこと」という意味になるように、ひらがな三字を入れなさい。

問十四　――線⑬「洪作はまだ眼覚めていた。」とありますが、この時の洪作の気持ちを説明しなさい。

受験番号

（　　）

（裏に続く）

国語　問題用紙

No. 2

/10 雙

一　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

皆さんが国際社会に出て、立派な日本人として認められるためには、自らの頭で常に考え、わが道を行くための努力が求められます。しかし、現在の日本の社会的な環境のなかで皆さんがわが道を行くのには、大きな障害が待ちうけています。

[a]、スポーツを考えてみてください。テレビのなかった私の子どものころは、スポーツがスポーツであったと思います。テレビの時代になり、野球でも、サッカーでも、マラソンでも、選手は、不特定多数の観客を相手に、〝見られる〟ことを前提として〝演技〟するようになりました。ホームランを打っても、ゴールを決めても、優勝のテープを切っても、すぐにインタビューが待っています。[a]、最近の野球のオールスター戦などでは、浴衣姿の女性タレントが続々と登場し、選手にインタビュー（といっても、ほとんどプレーと関係ない内容の薄い雑談）をするまでになりました。こうなると、スポーツも芸能番組と変わりがありません。

スポーツに限らず、①テレビカメラの前では、誰でも本能的に演技をします。テレビのニュースでとりあげられる国会の委員会など、集まった人々はカメラの前で演技の笑顔をみせます。町のお祭りでも、踊っている人々がテレビカメラに向かって演技をしています。このような時代の流れは避けては通れません。[b]、〝見られる人〟ではなく、常に自分であり続ける努力をしてはじめて、皆さんが自分を自分らしく表現するための道が拓けると思います。

テレビの時代になり、スポーツに限らず、あらゆる分野で、解説者が〝わかりやすく〟解説をしてくれます。読者の皆さんは、これは親切でありがたいことであり、良いことだと言われるかもしれません。[b]、解説によって、知らず知らずのうちに、自分の頭で考える努力をしなくなっていると感じたことはありませんか。私は、解説がどのような場合にも不必要だとは思いません。[a]、世界のさまざまな国で起きている紛争のニュースを伝える場合には、その歴史的な背景などの、客観的かつ明快な解説が必須です。

日本のプロ野球の解説を例にとって考えてみましょう。

解説者の話題は、肩の突っ込みが早過ぎる、投げるときの足の上げ方に問題がある、球が甘く、あの場面で投げることは許されない、シュート回転した球を投げたのは不注意だなど、細かい技術的な面に大きな重点がおかれます。

さらに解説者の話は、アナウンサーに促されて、あの選手は気迫があるとか、この選手はやる気がないとかなどに及びます。試合の行方を決するチャンス（あるいはピンチ）になって、ボールがピッチャーの手から離れバッターに近づいていく（　Ⅰ　）一瞬にも、②解説者の〝おしゃべり〟が止まらないことがしばしばあります。また、解説の内容自体も、放送しているテレビ局の〝営業方針〟に Ⅱ [...] されるのも大いに気になります。

解説者のおかげで、ボールやバットをじっさいに握ったことのない人までもが、野球の試合の評論をしているのをよく聞くようになりました。[b]、グラウンドで泥と汗とともにひたむきに闘った人にしかわからない野球が、しだいに遠ざかりつつあることもまた確かです。

最近では、多くの皆さんがアメリカ大リーグの放送をテレビで観戦しておられることと思います。音声は英語と日本語を選ぶことができます。日本語の放送では、日本のプロ野球の場合とまったく同じように解説（　Ⅲ　）です。

比較のため、音声を英語に切り替えて聴いてみてください。すぐに気がつくことですが、英語の放送では、日本の解説者のように、細かな技術的な解説はありません。ピッチャーのワンバウンドするボールを前に落として走者の進塁を阻んだキャッチャーの好守備を称えます。いまのホームランがいかに素晴らしかったかを、興奮とともに放送しています。③ただそれだけです。次の打者のイチローをみて「fun to watch !」[注1]と言ったり、「たいへんに flexible[注2]な選手で素晴らしい」と言ったりしています。

別の見方をすれば、評論家の立場ではなく、野球をする選手の立場に立って意見を述べています。それに、野球の観戦の妨げになる饒舌なところがありません。一方、「この記録は、いつ、どこの球場で、誰が作った歴史的な記録を破るものである」などのデータが、すらすらと口をついて出てくるのです。

それにもまして、実況にたずさわるアナウンサーのプロとしての実力には、本当に感心します。事実を的確に、興奮をもって流れるような音声で伝えるプロのアナウンサーによる実況を聴いていますと、長い伝統をもつ野球が「アメリカ国民の生活の一部」になっていることがよくわかります。

野球の解説は、ひとつの例にすぎません。④私は、これからの日本を担っていく若い皆さんに、〝評論家〟になってほしくありません。皆さんには、事実をどこまでも自分の頭で考えていく当事者になっていただきたいのです。そして、個性を磨き、広い視野をもつ柔軟な発想の大人に成長してください。繰り返しますが、解説だけで個性がなければ、他人を惹きつけることはありません。呑み込みが速く、解説が〝上手〟なだけでは、優秀な評論家にはなっても、新しいものを創造する人になることはないでしょう。これでは、あまりにも寂しいと思います。

注1　見ていると楽しいぞ（さぁ、見ものだぞ）。
注2　柔軟で順応性がある

（荒田洋治『自分をつたえる』より）

問一　[a]・[b] にあてはまる言葉を書きなさい。

問二　――線①「テレビカメラの前では、誰でも本能的に演技をします。」とはどういうことか、説明しなさい。

問三　――線②「解説者の〝おしゃべり〟」とありますが、〝おしゃべり〟とはどういうことか、答えなさい。

問四　（　Ⅰ　）にふさわしい語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　息があう　　イ　息がきれる　　ウ　息たえる　　エ　息づまる

問五　――線Ⅱ「[...] される」の部分に、Ⅱが「大きな影響を与えられる」という意味になるように、漢字二字を入れなさい。

問六　「解説（　Ⅲ　）」の（　Ⅲ　）にふさわしい語を次のア～エの中から選び、記号で答えなさい。

ア　もどき　　イ　だのみ　　ウ　ずくめ　　エ　しだい

問七　――線③「ただそれだけです。」は、何について、どのようなことを言っているのか、答えなさい。

問八　――線④「私は、これからの日本を担っていく若い皆さんに、〝評論家〟になってほしくありません。」とありますが、ここで言われている〝評論家〟とはどのような人なのか、説明しなさい。

三　次の各文について、{　　} 内のどちらかふさわしい語を選び、それを漢字で答えなさい。

(1)　兄は練習に {ギネン・ヨネン} がない。
(2)　まるいケーキを {キントウ・コウセイ} にわける。
(3)　チャンスに {カイシン・メイチュウ} のホームランが打てた。
(4)　すべての事件を {トウイツ・カクイツ} 的にあつかうことはできない。
(5)　この両国は三十年来 {ハラン・ケンアク} な関係だった。
(6)　酒造りの技を弟子に {デンジュ・デンタツ} する。
(7)　電車の中の {ザンリュウ・イシツ} 物を駅で半年保管する。

別紙

'10 雙

十一月初めの日曜日、小学五年生の洪作は、伯父で小学校長をしている石守森之進から、石守家の二男・唐平といっしょに棚場の祖父を訪ねるように命令された。山の奥まで入っていく途中で、石守家一門の伯母の家に寄った。

三十分程休んで、洪作と唐平は伯母の家を ①ジして、棚場へ向った。途中まで伯母が送ってくれた。持越部落を出ると、道は山へはいっていた。熊笹に覆われた細い道であった。洪作と唐平は口をきかなかったが、こんどは離れることなく、一緒になって同じ歩調で歩いた。山道になったので、二人ともひとりで歩くのは心細かった。洪作が先になったり、唐平が先になったりした。

洪作は門野原の家を離れて、このような山奥にひとりで住んでいる祖父に何となく ②常人ばなれしたものを感じ始めていた。これまで祖父林太郎のことなど一度も考えてみたことはなかったが、いまそこを訪ねて行こうとして熊笹の道を歩いていると、一体祖父林太郎は ③いかなる人物なのであろうかと思った。

……（中略）……

祖父林太郎の住んでいる家が眼にはいって来た時、洪作は ア【よくも】こんな淋しいところにひとりで住んでいられるものだと思った。その家の周囲はすっかり雑木林で埋まっていて、足を停めると、どこか近くを流れている小川の音が聞えるほか何も聞えて来なかった。そして山間の冷気が周囲から立ち上って来る感じだった。その家の前へ立つと、

「じいちゃん」

唐平は呼んだが、内部からは何の応答もなかった。二人はその家の周囲をぐるりと廻ってみた。家といっても、掘立小屋といった方がふさわしい小さい家だった。それでも横手へ廻ると、小さい縁がついていて、その縁側からのぞくと、四畳半ほどの部屋がふたつあって、奥の部屋に囲炉裡が切られ、食器が棚の上にきちんと並べられてあるのが見えた。こちらの部屋には勉強机が一つ置かれ、壁には、これもまたきちんとした感じで何着かの仕事着が掛けられてあった。洪作はこれまでに、④このように A な、このように B された家を見たことはなかった。

洪作と唐平はそこの小さい縁側に腰を降して祖父林太郎が帰って来るのを待った。縁側の前にある ⑤猫の ＿ ほどの庭には黄色の菊が咲いていた。

洪作は、妙にしんとした気持になってそこに腰を降していた。家の前面を覆っている雑木林はすっかり紅葉していた。葉は既に散り始めて、梢が半ば透いてみえていた。やがて遠からず葉一枚ない裸木の林がここからは眺められる筈であった。

洪作は傍に唐平が居ることも忘れ、妙に淋しい自分一人の思いの中にはいっていた。やがて葉は一枚一枚落ちて行くだろう。そしてすっかり葉がなくなった時、冬はやって来るだろう。冬がやって来た時、一枚の葉もなくなった木々は身を固くして、寒さに耐えるだろう。そんな木々と同じような生活を、自分の祖父はここでしているのだ。自分などの知らなかった孤独な生活がある。そしてその孤独な生活を自分の祖父は自分に課しているのだ。

「じいちゃんを探して来る」

唐平は縁側から立ち上って、どこかへ出て行ったが、⑥洪作は縁側から動かないでいた。動きたくない気持があった。十五分程すると、唐平は祖父林太郎と一緒に戻って来た。

祖父の顔を見た時、洪作はこれが祖父だったかと思った。いつのことか忘れたが、とにかくどこかで会ったことのある人物であった。痩せた老人は、粗末な仕事着を身につけて、少し腰を折った姿勢ではいって来た。

「洪か、イ【よく】来たな」

祖父は眼を細めた優しい表情をして、静かな声で言った。洪作は黙って頭を下げた。祖父は改めて ⑦頭のてっぺんから爪先まで見廻すようにして、

「大きくなったな。唐とどっちが大きいかな」

と言った。

「同じくらいです」

洪作が少し緊張して答えると、祖父はもう ⑧そのことからは思いを移している風で、

「どれ、椎茸飯でも御馳走することにするかな。――どっこいしょ」

そんなことを言って、台所の方へ廻って行った。唐平がここへ来る途中言ったように、粂さんという青年が祖父林太郎と一緒に住んでいた。粂さんが姿を現すと、洪作と唐平はその青年に連れられて、椎茸の榾木が並んでいるところへ連れて行かれた。

「こういう榾木の並べ方を合掌式と言うんだ。あんたっちの祖父ちゃが発明した並べ方だ」

粂さんは説明した。

「どうしてこんな並べ方をするの？」

洪作は訊いてみた。

「古いやり方だと、風通しが悪くて、椎茸が ウ【よく】生えないんだ。あんたっちのじいちゃんが教えてやったので、いまは九州でもみんな合掌式だそうだ」

それからまた粂さんは言った。

「木干し法って言ってな。このほた木につけたままで椎茸を乾燥させるのも、じいちゃんが発明したんじゃ。椎茸を外国に初めて輸出したのも、あんたっちのじいちゃんだぞ。その輸出も、木干し法が発明されたんでできたことだ」

そうした話は、学校の教師の口から聞いたことはあったが、いま粂さんの口から聞くと、全く違ったものに聞えた。洪作は榾木が一面に並んでいる場所を倦かず眺めていた。

⑨榾木などそれまで美しいとは思わなかったが、木の間から洩れている弱い秋の陽を浴びているここの榾木は、何とも言えず美しく見えた。

家へ帰ると、林太郎は囲炉裡の傍に坐って、みんなの帰るのを待っていた。釜には椎茸飯が炊かれてあり、祖父はその釜から直接に四つの茶碗へその飯を移した。林太郎は食事をしながら、椎茸というものは日本には大昔からあり、九州の香椎という名はそこが椎茸の産地だったことを示しているとか、その頃は一部の上流階級の食べものだったが、元禄の頃から庶民の口にはいるようになったとか、椎茸の歴史を話してくれた。

「わしの家は昔から椎茸作りをしていたらしい。椎茸作りの血が流れているから、わしも椎茸を作るようになったんだ。唐の体にも、洪の体にも椎茸作りの血が流れている」

洪作はこのような話を聞いたのは初めてであった。⑩そんな血が自分の体の中にも流れているだろうかと思った。

「伯父ちゃんはなぜ椎茸作らなかったの？」

洪作は校長の石守森之進のことを訊いてみた。椎茸作りの血の流れている家の長男に生れながら、どうして森之進はこの祖父林太郎の仕事を受け継がないで、教職についたのであろうかと思った。すると、祖父は、

「仕事は自分の一番好きなものをやればいい。あの伯父ちゃんは教育ということが一番立派な仕事だと考えたんじゃ。それで先生になりおった。唐も椎茸を作ることが一番立派な仕事だと思ったら椎茸作りになったらいい。役場へ勤めることが一番立派だと思ったら役場へ勤めればいい。洪も同じじゃ。洪は上の学校へ行って、大学へ行くことになるんじゃろ。何をやるようになるかな。お医者さんかな」

と言った。⑪洪作は話を聞いていながら、自分は親戚の中でこの祖父が一番好きだと思った。そしてこの祖父を一番尊敬すると思った。こんなに静かな口調で、自分の将来のことに触れた話などしてくれる人にぶつかったのは初めてのことだった。洪作は椎茸飯は美味かったが、沢山は食べられなかった。握り飯も食べていたし、柿も食べていたので、すっかり満腹していた。しかし、折角祖父が作ってくれたので我慢して二杯目を替えて食べた。

食事を終ると、洪作と唐平はすぐ帰路に就いた。秋の日は暮れるのが早いので、湯ケ島に帰り着くまでに日が暮れたらいけないという林太郎の配慮から、早々に追い立てられるようにして帰されたのであった。帰路は洪作と唐平は仲よく一緒に歩いた。洪作は同じ椎茸作りの家の血が流れているということで、唐平にも親しいものを感じた。

夕方湯ケ島に帰り着くと、その晩唐平は土蔵に泊った。親戚の者が土蔵に泊ったのは殆ど初めてと言ってよく、洪作は嬉しかった。洪作は唐平に対する意地の悪い厭な少年だという印象をその晩改めた。⑫人 ＿＿ する口下手な少年であったが、エ【よく】話してみると、洪作と気の合うところがあった。

「おらあ、祖父ちゃんみたいに椎茸を作るか、父ちゃんみたいに先生になるか、まだ決めてないんだ。その二つのうちのどっちかをやることだけは決っている」

唐平はおぬい婆さんの鼾が聞えている闇の中で言った。洪作はそんなことを聞くと、自分が何になるかまだ決っていないことが、何となく落ち着かない気持だった。早く決めないと遅くなるような気がした。

唐平の寝息が聞えてからも、⑬洪作はまだ眼覚めていた。そして棚場の山の中で、祖父林太郎も今頃眠っているのであろうかと思った。深夜の棚場の死のような静けさが、洪作には今はっきりと自分の五体に感じられるような気持だった。洪作は自分が心から尊敬できる人物を自分の身近いところに発見したことで、やはりその晩は昂奮していた。

受験番号